

二〇二二年度 三田学園高等学校入学試験問題

国 語

〈注意〉 各問題の解答はすべて解答用紙に書き入れなさい。

※出題の都合上、漢字にふりがなをふる、漢字をひらがなにするなど、本文の一部に改変を行っています。

※特に指示のない限り、字数制限のある問題では句読点や記号も一字として数えます。

受験番号	
------	--

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

誰にでも、眠れない夜ってありますよね。

そんな夜には、宇宙のことを考えてみるのもいいかもしれません。

そもそも、もし夜というものがなかったら、私たちは「宇宙」という存在に気づかなかったのではないのでしょうか。なぜなら、

【X】また、青空の果ては遠いようにも、でも意外に近いようにも思えますよね。ですから、明るい昼の空を見て、何億・何兆もの星や銀河が散らばる広大な宇宙の姿を思い描くのは、まずもって不可能なんです。

アメリカのSF作家アシモフが書いたSF小説『夜来たる』をご存じでしょうか。一九四一年に発表された、文庫本で六〇ページほどの短編ですが、SF史上に名高い古典的傑作として知られています。

舞台は六つの太陽に囲まれた惑星ラガッシュです。六つの太陽のうちの少なくとも一つが必ず上空で輝いているラガッシュは、常夏ならぬ「常昼」の星であり、夜というものが存在しません。そのために天文学がほとんど発達せず、ひとびとはラガッシュと六つの太陽が宇宙にある天体のすべてだと信じて、独自の文明を築いていました。

（A）、二〇〇〇年に一度、日食による「夜」が訪れた時、悲劇は起こりました。無数の星々の出現に天文学者たちは驚愕し、自分たちのちっぽけな世界観が崩壊したことに絶望します。民衆は初めて体験する真の暗闇に恐れおののき、光を求めて街に火を放ちます。こうして惑星ラガッシュの文明は一夜のうちに崩壊した——これがそのあらすじです。

「二〇〇〇年に一度だけ訪れる夜」というその設定だけで、思わず引き込まれてしまいますよね。SFファンによる人気投票でも常に上位に入る作品だというのもうなずけます。ちなみにラガッシュの文明は一晚で滅びましたが、当時二十一歳の無名作家だったアシモフは、この作品で一夜にして人気作家の仲間入りをしたそうです。

私たちの地球では、幸いにして昼と夜が交互に訪れるので、人間は広大な宇宙の存在に最初から気づいていました。そんな私たちからすると「われわれは何も知らなかった！」と泣き叫ぶラガッシュの天文学者や、闇を恐れて街に火を付けるラガッシュの民衆の姿は、哀れさを通り越して滑稽にも見えますよね。

でも、私たちはラガッシュの人たちを笑えないかもしれません。（B）あなたも私も、広大な宇宙の本当の姿の、ごくごく一部しか知らないんですから。

私たち人間は、はるか昔から宇宙に関心を抱き続けてきました。古代のひとびとは、太陽や月、惑星の運行の様子、あるいは日食や月食といった天文現象を観測し、^②その法則性を解き明かそうとしました。また、宇宙がどこまで広がっていてどんな構造をしているのか、宇宙がいつどのように作られたのかを、あれこれと想像してきたのです。

^③なぜひとは、宇宙について知りたいと思うのでしょうか。

理由はいろいろと考えられますが、大きく二つの理由が挙げられると思います。第一の理由は、ひとは「自分を取り巻く世界のことを知りたい」という強い思いを持っていることです。それは、好奇心からでもあります。同時に「周囲の世界とのつながりを通して、自分が何者なのかを知りたい」というIな思いにもつながっているはずです。

アメリカのボストン美術館のヨーロッパ絵画ギャラリーに、一枚の大作が展示されています。フランスの画家ゴッギャンの『われら何処より来たるや、われら何者なるや、われら何処へ行くや』です。誕生、成長、老い、そして死という人間の一生が、青を基調とした横長の画面の右から左へと描かれています。

「私は、なんで生まれてきたんだろう。そして死んだら、どこへ行くんだろう」

「私って、結局、どんな存在なんだろう」

こんなとりとめのないことを、でも人間にとって「究極の問い」といえることを、誰でも一度は思ったことがありますよね。特に、自分に自信がなくなったり、自分の存在する理由がわからなくなったように感じた時に、こんな思いを抱くものです。ゴッギャンも、母国フランスで画家として認められず、第二の故郷タヒチで貧困と病気に苦しんでいるさなかに、いわば自分の遺言として、この作品を描いたそうです。

自分がわからなくなった時、ひとはどうするのでしょうか。

きっと、自分の周囲を見渡すはずです。周囲の世界がどうなっていて、その中で自分が世界とどうつながっているのかを考えるのです。そうやって、自分の現在の立ち位置を確認し、自分を取り戻そうとするのでしょうか。

ですから、世界を知りたいという思いは、自分が何者なのかを知りたいという思いと同じなのです。そして「周囲の世界」の極限こそが、広大な宇宙です。（C）人間は、自分のことを知りたいから宇宙についても知りたいのだ、といえるのではないのでしょうか。

とはいえ、「自分が何者かを知りたいから、ひとは宇宙に興味を持ってきた」なんていうと、かなり哲学的ですよ。そんな高尚な理由だけではなくて、もっと身近で切実な理由もあったに違いありません。ひとびとが宇宙に関心を抱いてきた第二の理由、それは宇宙の出来事が人間の暮らしに直接的な影響を与えると信じられてきたからです。

天文学はもっとも古い起源を持つ科学といわれます。それは読んで字のごとく「天からの文」、つまり天のメッセージを理解しようとする学問でした。天からの手紙を読み解きたい、天の意思を知りたいと考えていたのです。

（D）、太陽や月、星々の動きを観察した古代のひとびとは、天体の運行がきわめてIIであることに気づきました。その規則性を元にして作られたのが暦です。

古代エジプトでは、おおいぬ座の一等星シリウスが日の出の直前に地平線に現れる日を「一年」の始まりとする暦を作っていました。冬の夜空に燦然と輝くシリウスは、太陽を除けば全天でもっとも明るい恒星として知られています。古代エジプトの時代には、このシリウスが日の出の直

前に現れる時期は、ナイル川が氾濫^{注8}する雨期の始まる時期と一致していたそうです。ナイル川が氾濫すると、上流から運ばれてきた肥沃^{注9}な土が川の周辺の耕地を潤します。そこでひとびとは氾濫が収まった後に作物の種をまくんです。このように農作業の適切な時期を教えてくれるのが「天からの文」だったんですね。

（E）、日食や月食が起きたり、彗星^{すいせい}などが現れたりといった「天変現象」が起きると、地上にも何らかの影響が現れるはずだと古代の人は考えました。天の異変は、天子の死や飢饉^{注10}の発生といった地上の災いの前触れであり、天からの警告だと思われたんです。こうした天変占星術は、おもに東洋で発展しました。

一方、西洋では、太陽や月、そして金星や火星などの惑星の位置や動きが個人の運勢を左右すると考えられました。これが宿命占星術です。古代ローマの時代には、ローマ皇帝から一般の庶民^{しゅみん}に至るまで、重要な意思決定には必ず宿命占星術を使い、天の意思を知ろうとしたそうです。天からのメッセージに耳を傾けた時代は、ひとびとにとって宇宙が非常に身近な時代だったといえるでしょう。古代の人は宇宙の大きさを今の私たちよりもずっと小さく考えていましたから、^④天での出来事は地上の自分たちに直接の影響を与えるだろうと素直に信じていたんですね。

当時に比べれば、現代は宇宙に対する知識が飛躍的に深まっています。でも「^⑤広大な宇宙」という正しい知識を持ってしまったために、現代の多くの人は宇宙に対してあまり関心を払わなくなったとも考えられるので、ちょっと残念ですね。

（佐藤勝彦『眠れなくなる宇宙のはなし』より）

注1 SF小説…空想科学小説。

注2 常夏……いつも夏のようなこと。

注3 驚愕……非常に驚くこと。

注4 われら何処^{いずこ}より来たるや、われら何者なるや、われら何処へ行くや

……われわれはどこからきたのだろうか、われわれは何者だろうか、われわれはどこにいくのか。

注5 高尚……程度が高く、上品なこと。

注6 燦然と……きらきらと輝くさま。

注7 恒星……自ら発光する天体。

注8 氾濫……川の水がいっぱいになってあふれ出ること。

注9 肥沃……土地がよく肥えているさま。

注10 飢饉……不作のため食物が足りなくなること。

問一 （A）～（E）に入る語として最も適当なことを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア なぜなら イ たとえば ウ つまり エ でも オ また

問二

I	II
---	----

に入る語として最も適当なことを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 原始的 イ 根源的 ウ 規則的 エ 受動的 オ 論理的

問三 ——部①「自分たちのちっぽけな世界観」とは、どのようなことですか。二十五字以内で解答欄に合うように抜き出して答えなさい。

問四 「X」に入る文として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 宇宙のことを考えようと思えば、昼間ではなく夜にならないといけないからです
イ 夜になると、忙しい昼間ではなかなか作ることのできない考える時間を持てるからです
ウ 夜がなければ、この地球の外に宇宙があるということにも気がつかないからです
エ 昼間に空を見上げても、太陽が眩しく輝くばかりで他の星の姿は見えないからです

問五 ——部②「その法則性を解き明かそう」とした結果、私たち人間が手に入れたものを一字で抜き出して答えなさい。

問六 ——部③「なぜひとは、宇宙について知りたいと思うのでしょうか」とありますが、どうしてですか。筆者の考えを説明しなさい。

問七 ——部④「天での出来事は地上の自分たちに直接の影響を与えるだろう」とありますが、その考え方から生まれた「占い」に関して「東洋」と「西洋」の違いを説明しなさい。

問八 ——部⑤『『広大な宇宙』という正しい知識を持ってしまったために、現代の多くの人は宇宙に対してあまり関心を払わなくなったとも考えられる』とありますが、それはどういうことですか。最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 「広大な宇宙」だと知ってしまったがゆえに、宇宙全体のことすべてが分かったと勘違いしてしまったと考えられるということ。
イ 「広大な宇宙」だと分かったからこそ、自分の力では宇宙全体のこととは理解できないと思い込んでしまったと考えられるということ。
ウ 「広大な宇宙」という知識だけが先に立ってしまって、本当の宇宙の姿を見ようとしなくなってしまったと考えられるということ。
エ 「広大な宇宙」という知識があることによって、宇宙が自分の生活に身近なものだという意識が薄れてきたと考えられるということ。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「じゃあ、『梅』の句についてはまた明日ということだ」
助かった。一日中考えても「梅」の句が全然浮かばなかった航太は、ほっとして家路につく。
明日まで考えれば、何か思いつくだろう。
ところが、家に帰るなり、親父の陰悪な声が飛んできた。

「航太！　そこにすわれ」

「な、なんだよ、親父」

親父がこつちをにらみつけている。

「さっき須賀先生から電話があったぞ。お前、三者面談のことをおれに隠しとったな」

……しまった。

進路相談のための面談の希望日を保護者と相談の上、担任に報告すること。その須賀の指示をのりくりりとかわしていたつもりだったが、須賀が親父に直接連絡してしまったのか。

間に入ったばあちゃんがおろおろしている。食卓にはうまそうな鯛の刺身が見えるが、これにありつくにはもうしばらくかかりそうだ。

①航太は覚悟を決めて、親父に向かい合う。

「だってさ、おれがいくら言っても、^②親父、賛成してくれないじゃないか。だから、まだ須賀に話す段階までたどりついていないと思ったんだよ」

「お前が親の言うことを聞けばいいだけだ。とにかく、将来につながるような職種を決めろ。大学でもなんとかしてやるし、専門学校でもいい」

「それだけの金があるならさ、製菓学校に行かせてよ」

「金はなんとかあると言ったが、無駄金はないぞ」

「無駄って言い方はないだろう！」

いい加減、航太は物わかりの悪い親父に頭に来た。

「菓子作りを勉強するのが無駄ってさ、じゃ、それ、親父の人生が無駄ってこと？」

言ってから、ぎくりとする。今のは言いすぎ……かもしれない。ついエスカレートしてしまった。

怒鳴りつけられるかと思ったのに、親父はまた黙り込んでしまう。

――ほら。ここで話が止まっちゃうんだ。どこまで行っても、平行線のままで。

手をもみながら航太と親父の顔を交互に見ていたばあちゃんが、そこで遠慮がちに割って入ってきた。

「さあ、とにかくご飯ご飯」

透き通った鯛の身が、乾き始めてわずかに反り返っている。

「航太、とにかく面談の日を先生と決めるからな」

「……わかった」

今日のところはこれで休戦ということらしい。

「須賀先生の意見をちゃんと聞くんだぞ」

それ以上会話が弾むはずもなく、沈黙の中で夕飯は終わった。朝が早い親父は早々に自分の部屋へ引っ込んだ。

航太はばあちゃんを手伝って茶碗を片づける。台所のガス台には白いホーロー鍋がかかり、何かがぐつぐつと音を立てて、航太の気分とは正反対の甘い匂いを放っていた。その鍋の中をしきりに掻き回しているばあちゃんに、航太は謝る。

「ごめんな、ばあちゃん」

「何が？　航太」

「せっかく鯛をさばいてくれたのに、夕飯の雰囲気全台無しにしてさ」

「いいんだよ、そんなこと」

ばあちゃんはすまなさそうに笑う。

「ばあちゃんこそ、ごめんねえ。こういう時にお母さんだったら、うまいこと二人を取りなせるのかもしれないけどねえ」

「無理だよ。親父、頑固だもん。……糞親父」

「そんなこと言っちゃいけないよ、航太」

「だってさ……」

それでも親父とじゃ話にならないと切り捨てられないのは、航太にも親父の考えがわからないではないからだ。分校さえ閉校に追い込まれるような、人口減少・過疎化を絵に描いたような島で、贅沢品の和菓子を作り続けていけるかどうか。先の見通しが暗いのはたしかだからだ。

――でも、それでも親父は今までなんとかやってきたじゃないか。

小市堂を否定されると、親父が、親父自身と航太の十七年の育ち方まで否定しているような気にさせられる。

それが悲しいし、悔しい。

そんなわけで、結局その夜は俳句どころではなかった。

航太にしてはあれこれと思い悩んで眠れなかったせいで、翌朝は大幅に寝過ぎしてしまった。息せき切って走ったおかげでバスにようやく間に合った始末だ。

当然、朝練もすっぱかした。

始業時間ギリギリに教室に滑り込み、河野に平謝りする羽目になる。

「放課後は、必ず来るのよ」

「わかってるって」

「梅」の句はまだできていない。昨日の今日で、気持ちの整理がつかないままだ。

放課後、それでもどうにか頭に浮かんだものをそのまま紙に書きつけて部室へ向かい、まずは河野の句を聞く。

③ 薄闇の廊下の奥や梅香る

——きれいな句だな。ぱっと情景が浮かんでくる。きっと夜、家の中にまで梅の花の匂いがただよってきているのだろう。……あ。

航太はあることに思い当たって思わず口走った。

④ 「そうか、まずい」

「何、小市？」

「いや、なんでもない」

航太は首を振る。だが、内心あわてていた。梅と言ったら、そうか、普通は梅の花のことか。航太にその発想はなかったのだ。

「じゃ、次、小市」

うわ。でもここまで来ては仕方ない。航太は覚悟を決めて口を開いた。

「煮た梅も昨日のことも瓶詰に」

これで何のことかわかるだろうか。また意味不明と切り捨てられるのか。だが。

「ほう、航太、なかなか面白いぞ」

「え？」

義貞先生に褒められて、航太はかえってあわててしまった。

「でもおれ、梅の花を詠むんだって知らなかったから、これ、梅の実のことなんだけど」

河野がうなずく。

「うん、それはわかる。この句の梅は瓶詰にした梅の実だよね。でも別に梅の実を詠んではいけないってことはないもの。問題ない」

「あ、そうなんだ。よかった」

「ただ問題があるとすれば……」

和彦がぱらぱらと歳時記をめくりながら言った。『煮た梅』って季語と考えていいんですか？ ぼくの歳時記にはないんですけど。もちろん『梅』

はありますが、それは花のほうのことで、春の季語になっちゃいますから」

「そうだったの……」

「『梅漬ける』なら夏の季語にありますけどね。梅干しのこと」

「でも、これ、小市の家で梅の甘露煮を作ったか何か、そういう句でしょ？ 甘露煮と梅干しじゃ結構違うよね。夏の季語になってる『梅の実』ってのはつきり言っちゃえばもちろん問題解決だけど、『煮梅の実も』じゃ今度は十七音に収まり切らない……」

航太そっちのけでみんなが熱中してくれている。ありがたさのあまり、航太は口が出せなくなってしまった。実は⑤ 早めに白状したほうがいいことがもう一つあったのだが……。

「小市！ 言葉を足してみたらどう？ 梅の実煮る昨日のことも瓶詰に。……長いか」

「でも、瓶詰には作った時のいろんな気持ちも詰まっているんだって、そういう句であることは残したいと思います」
これは京。

「うん、そうだよね」

「あ、そうだ。じゃあ『昨日のこと』を言い換えてみたらどうです？」

「あ、あのさ……」

そこで航太はようやく口を挟むことができた。「実はさ、これ、本当のことじゃないんだ」
全員の目が航太に集まった。

「どういうことです？ 小市先輩」

「どうしても句ができなくてさ、それもあつたし別のことでいらしっちゃって……」

昨日の夜の、激しい言い合いのこと。

そういう重苦しい空気の夜にもかかわらず、小市家中には全然そぐわない甘い匂いが立ち込めていたこと。

——ご近所から母をもらってね、あんまり量が多いのでジャムにしてみたんだよ。

ばあちゃんが鍋に作っていた苺ジャムの匂いは夜中、いや、今朝になってもまだ残っていた。

親父とのやり取りで頭が一杯だった航太も、ばあちゃんが朝ご飯に出してくれたジャムを見た時には、そのきれいな色に見とれた。

——昨日おれが糞親父って悪態をついていた時に、煮られていた苺なんだ。

バスに遅れそうになりながら口に押し込んだトースト。又^aられたジャムは香り高くおいしかった。

——この透き通った赤いジャムを使ったら新しい菓子も作れそうだ。白餡に混ぜたらきれいなピンク色になるだろう。でも、不思議だな。おれと親父がぐちゃぐちゃしていた時間に、このジャムはこんなにおいしく作られていたんだ。

そんなことを考えていたから「梅」の句は全然思いつけなかったのだ。

「……つまり、梅じゃなくて苺を煮てたんだよ。でもどうしても句が浮かばなくて、だから勝手に梅に替えちゃったんだ」

「そもそも今年の梅の実は、まだ採るほど大きくなっていないですしね」

「そうそう。……だから、これ、苦し紛れの嘘なんだ」

しょんぼりとして航太はそう話をシめくくったが、見ると、河野は別に眉を吊り上げていない。そしてこう言った。

「だからどうしたって？」

「へ？ いやどうしたって……」

助けを求めるように義貞先生を見やるが、こちらも平然とした顔だ。

「俳句というのはそれでもいいと思うぞ」^⑦

義貞先生がにこにこ言う。「もう少し推敲して、土曜日に出してみんさい」

「よかったね、小市。デビュー戦がカザれるよ」

「そう？ 本当にいいの？」

航太だけでなく、京も納得していない顔だが、義貞先生は囁んで含めるように説明してくれた。

「この句の眼目は、瓶詰の中にさまざまな過去も閉じ込められているというところじゃろう。それが甘くておいしい果実の砂糖煮だからこそ、かえって苦さや辛さを含めた現実を際立たせる。大事なのはそこだ。果実の種類はこのさい、複雑な気持ちを引き立てるための踏み台と思えばよい。文学的現実というやつじゃな」

（森谷明子『南風吹く』より）

注 1 歳時記：ここでは「俳句歳時記」のこと。俳句の季語を集めて分類し、解説と例句をほどこしたもの。

注 2 推敲……詩文の字句を何度も練りなおすこと。

問一

部 a と d のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに改めなさい。

問二

部 ①「航太は覚悟を決めて」とありますが、なぜ「覚悟」が必要なのですか。その理由の説明として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 三者面談を父親に隠していた理由を、うまくごまかさなければならぬから。

イ 進路に関する父親との話し合いは、決着のつかない言い合いになるから。

ウ 疲れて帰り、早く食事にあつきたかったが、それをあきらめることになるから。

エ 祖母に心配をかけるようなことをしたくないのに、逃れられそうにないから。

問三

部 ②「親父、賛成してくれないじゃないか」とありますが、「親父」が賛成してくれないのはなぜだと航太は考えていますか。四十字以内で答えなさい。

問四

部 ③「薄闇の廊下の奥や梅香る」の俳句と句切れが同じになる俳句を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 名月や池を巡りて夜もすがら

イ 雪解けて村いっぱいの子どもかな

ウ 草山に馬放ちけり秋の空

エ 噴水のしぶけり四方に風の街

問五

部 ④「そうか、まずい」とありますが、何が「まずい」のですか、説明しなさい。

問六

部 ⑤「早めに白状したほうがいいこと」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 付け焼刃で作ってきた句であるということ。

イ 季語について何も考えていなかったということ。

ウ 事実ではないことを句にしてきたということ。

エ 俳句にふさわしくない怒りがもたっていること。

問七

部 ⑥「眉を吊り上げていない」とありますが、「眉を吊り上げる」が表す感情として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 落胆 イ 失望 ウ 驚嘆 エ 立腹 オ 心配

問八

部 ⑦「俳句というのはそれでもいいと思うぞ」とありますが、「それでもいい」というのはなぜですか。その説明として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大事なものは、甘い果実が複雑な気持ちを引き立てているということだから。

イ 梅と苺はどちらも同じ果実であるため、とりかえることが可能だから。

ウ 父親との大変な言い争いが起こった後では、余裕がなかっただろうから。

エ 俳句というのはそもそも「ウソ」を含むことを前提としているから。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、魏の文王、我は賢王なりと思ひて、臣下の中に「朕、賢王なるや」と問ひ給ふに、仁佐といふ大臣、「君は賢王にてはおはせず」と申す。
私は

「^①いかなれば」と宣へば、「天の与ふる位を受くるこそ賢とは申せ、^②威を以て位に居給ふ、これ賢王の儀にあらず」といへり。伯父の王位
おっしゃったところ

をうち落して、かの后をとりて我が后とし給へることを申しけるにこそ。さて^④瞋りて座席を追ひたてらる。次に郭課といふ大臣に、「朕は賢王
怒って

なりや」と問ひ給へば、「賢王とこそ申さめ」と申す。「何の故」と宣へば、「^⑤賢王には必ず賢臣生まる」と^⑥申しければ、この詞を感じて、仁佐

を召し返し、^⑦政正しくし、賢王の名を得たりといへり。君も臣も賢なる世こそあらまほしく侍れ。

政治を

望ましいことでございます。

(『沙石集』より)

問一 ―― 部①「いかなれば」と同じ意味の言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問二 ―― 部②「威を以て位に居給ふ」は具体的にはどのようなことを指していますか。本文中から三十字以内で抜き出して答えなさい。

問三 ―― 部③・④・⑥の動作の主体(主語)は誰ですか。それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文王 イ 仁佐 ウ 伯父 エ 郭課

問四 ―― 部⑤「賢王には必ず賢臣生まる」とありますが、この言葉で「賢臣」とは誰のことを指していますか。問三の選択肢から選び、
記号で答えなさい。

問五 「文王」はなぜ「仁佐を召し返し」たのですか、説明しなさい。

四、次のア～エを現代仮名遣いにあらため、ひらがなで答えなさい。

ア にほひ イ あふさか ウ けふ エ くわんげん

